

〈コラム〉

人生のターニングポイント

大山 壮雄*

Takeo OYAMA*

2012年夏、私はイギリスにあるサウサンプトン大学の修士課程(MSc)を卒業した。留学生活で私は何をして何を得たのか。1年間を振り返れば、私は始めから最後まで「チャレンジ」をしていた。

サウサンプトン大学に入学するまで

海外進学を考え始めたのは大学3年の中盤だった。世間では就職活動が始まっており、私も就職という進路を考えていた。周りに流されるように、就活イベントに参加し、選考を受けていたが、当時の私は少なからず自分の現状に満足できずにいた。将来を考えた時、漠然と「このままでいいのだろうか」と感じていた。

私は大学2年の夏、コロラド大学へ短期留学をしていた。英語はほとんど話せなかったが、初めての海外生活は何もかもが新鮮で刺激的だった。その時私は、「世界は広いな。もっと世界を見てみたい。そのために英語ができるようになりたい。」と強く思った。そして日本に戻ってからは英語の勉強に没頭した。同時に、海外への興味はますます大きくなっていった。

そのような背景があり、最終的に私は「海外の学校に進学する」という、進路を選択した。進学先について、インターネットで調べたり、留学エージェントに相談したりするうちに興味を持ったのは、イギリスの大学院という選択肢。ヨーロッパという地

理的要素や、1年間で修士号を取得できることが魅力的だった。そして、ご縁があって、サウサンプトン大学への入学を決めた。

私は、海外大学院への進学は自分の人生のターニングポイントと確信していた。期待や不安など様々な感情が入り混じっており、何が起これるか、自分はどうなるのか、全く想像できなかった。それでも不思議と、自分の選択は絶対正しいと信じていた。

サウサンプトン大学

サウサンプトン大学はイギリス南部にある国立の総合大学である。学部生と大学院生合わせて、学生数は約23,000人。国の主要な研究大学連合であるラッセル・グループのひとつである。私はその大学の経営大学院に入学した。

サウサンプトン大学での生活

留学中の1年間は、「チャレンジ」と「卒業」が大きな目標だった。1年という限られた時間で、「可能な限り様々な経験を積むこと」、そして、「必ず1年で卒業すること」を自分自身に言い聞かせて、毎日を過ごしていた。

授業はほぼ毎日あり、内容は難しかった。また、課題の量は相当多く、予習のためのリーディングやレポートが常にあった。特にリーディングには多くの時間を費やし、1週間で複数冊、数百ページ読むこともあった。授業についていくこと、課題やテストで良い成績を取ることに常に追われていた。そのため、毎日授業前後には図書館に行っていた。図書

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sports Science, Juntendo University



(クラスメートと Farewell Party で)

館は早朝から深夜までオープンしており、自習スペースの他に多数のミーティングルームがあり、売店もあった。非常に充実している設備の中で、勉強に打ち込むことができた。

留学中は大学の寮に住んでおり、インド人、中国人、香港人、台湾人とルームシェアをしていた。友人やクラスメートといつでも会え、キャンパスが近いという点で、寮生活には多くの利点があった。

友人とはさまざまなトピックについてよく議論をした。話についていけないこともあったが、議論を深める中で、異国の経済や習慣、人間関係、考え方などについて理解を深めることができた。

また、キャンパスからさほど遠くない場所に空港があり、時間があれば国内だけでなくさまざまな場所に出かけた。手軽に海外旅行ができるのは、ヨーロッパに留学することの醍醐味のひとつであろう。

卒業とその後

四苦八苦な1年間だったが、必要な単位を取り、修士論文を仕上げ、無事に卒業することができた。卒業後すぐに日本で働くことが決まっていた私は、残念ながら卒業式には参加できなかったが、修了証が手元に届いたときは感無量であった。

1年という限られた時間だったが、留学を通して世界中の人や文化を知り、視野が大きく広がった。また、自分はどんな人間で、将来どんなことがしたいのか等、じっくりと自分と向き合うことができた。

留学を経て、私はグローバルな市場調査やコンサルティングの仕事に携わった。その後、グローバルに活躍できる人材を増やしたいと強く感じるようになり、現在は人材育成に携わっている。留学の経験を最大限還元し、世界における日本人のプレゼンスを高めていくことが、今の私の使命であると感じている。